



新 版

隠喩としての病い エイズとその隠喩

スーザン・ソントグ

富山太佳夫訳

みすず書房

新 版

エイズとその隠喩

スーザン・ソントグ

富山太佳夫訳

みすず書房

新 版

隠喩としての病い エイズとその隠喩

スーザン・ソントグ
富山太佳夫訳

1992 年 10 月 28 日 第 1 刷発行
1993 年 8 月 10 日 第 2 刷発行

発行者 小熊勇次

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目 17-15

電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社) 振替 東京 0-195132

本文印刷所 三陽社

扉・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1992 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-04555-9

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

隠喩としての病い	3
エイズとその隠喩	133
原註	272
訳者あとがき	288

隠喩としての病い

ロ
バ
ー
ト
・
シ
ル
ヴ
ア
ー
ズ
に

病氣とは人生の夜の側面で、迷惑なものではあるけれども、市民たる者の義務のひとつである。この世に生まれた者は健康な人々の王国と病める人々の王国と、その両方の住民となる。人は誰しもよい方のパスポートだけを使いたいと願うが、早晚、少なくとも或る期間は、好ましからざる王国の住民として登録せざるを得なくなるものである。

私の書いてみたいのは、病者の王国に移住するとはどういうことかという体験談ではなく、人間がそれに耐えようとして織りなす空想についてである。実際の地誌では

なくて、そこに住む人々の性格類型についてである。肉体の病氣そのものではなくて、言葉のあやとか隠喩（メタファ）として使われた病氣の方が話の中心である。私の言いたいののは、病氣とは隠喩などではなく、従って病氣に対処するには——最も健康に病氣になるには——隠喩がらみの病氣観を一掃すること、なるだけそれに抵抗すること、最も正しい方法であるということだが、それにしても、病者の王国の住民となりながら、その風景と化しているわけばしい隠喩に毒されずにすますのは殆ど不可能に近い。そうした隠喩の正体を明らかにし、それから解放されるために、私は以下の探究を捧げたいと考えている。

仰々しくも隠喩に飾りたてられた病氣が二つある——結核と癌と。

前世紀の結核と今世紀の癌と、この二つのものが擡立てる空想といえ、すべての病氣は治療できるということが医学の大前提になっている時代にも、手におえぬ氣紛れな病氣——つまり、正体不明の病氣——とされるものへの反応の典型として挙げられるものである。こういう病氣はどうしても神秘化されやすい。結核の原因がつかめず、医者の治療もとんと効かなかった時分には、結核とは知らぬ間に執念深く生命を盗みとる何かであると考えられた。今日、ノックもせずに入り込んでくる病氣といえ

ば癌であつて、ひそかに侵入する非情の病氣ということになっている——癌のこのような役割は、結核の場合のように、いつの日にかその原因が究明されて効果的な治療法が見つかるまでは続いてゆくことだろう。

病氣が謎めいて見えるのは、もとを糺せばそこに未知の何かがあるように思えるからだ、病氣自体（昔なら結核、今なら癌）がまことに古めかしい恐怖心を掻立てるということもある。ひとつの謎として強く恐れられている病氣は、現実にはともかく、道徳的な意味で伝染するとされることがある。たとえば、癌にかかつてみたら、癌は結核に似た伝染病だと言わんばかりに、親戚や友達からはのけ者にされ、家族からは消毒の必要な人間として扱われたという人々は驚くほど多い。神秘的な悪とされる病氣にかかった誰かと接触するのは違反行為であると思つたり、下手をすると、タブーの侵犯になると思つたりするわけである。病名自体が魔力を持つとされることがさえる。スタンダールの『アルマンズ』（一八二七年）には、「結核」という言葉が主人公

の病状を悪化させるのを恐れた母親が、その言葉を口にするのを拒むところがあった。またカール・メニンジャーは、『『癌』の一語が（そう簡単には）病気に屈すまいと思われていた患者の命取りになることもあるようだ」と述べている（『生のバランス』）。彼の発言は、実は、今日の医学や精神医学で幅をきかせている反知性的な敬虔論や底の浅い思いやり論をよしとする立場からのものである。「苦痛、苦悩、能力障碍のゆえにわれわれに相談に来る人々が、おぞましい病名をベタベタ貼りつけられるのに憤慨するのは当然だ」。メニンジャー博士は、医者がかく「病名」貼りを、「ラベル」貼りをやめるように勧める（「われわれの仕事はこの人々を助けることであって、その苦しみを倍加することではない」）——だが、これでは結局、秘密主義と医者の子親的性格を強化することになりはしないか。病名をつけること自体が侮蔑的だとか、おぞましいとかいうのではなく、「癌」という病名がそうなのである。病気が病気としてではなく、悪として、無敵の略奪者として扱われる限り、大抵の人々は癌にかか

ったと知れば、元気をなくすだろう。癌患者にその病名を話すのをやめても、とても解決にはならないわけで、病気の捉え方を正し、非神話化するしかないのである。

さほど昔のことではないが、結核にかかったと知るのが死刑判決を聞くにも等しかった頃には——今日、一般には癌すなわち死とされるのと同じである——結核患者にも、患者の死後はその子供にも、病名を隠しておくのが普通であった。患者が病氣のことを承知している場合でさえ、医者も家族もおおっぴらにその話をするのは洩ったものであった。一九二四年四月、その二ヶ月後には死処となる筈のサナトリウムから、カフカは友人に書き送っている。「言葉の上では確かなことは何も判らない。結核の話になると……誰もが口ごもり、言葉を濁し、ぼかしてしまふから」。これが癌となると、隠蔽はさらに徹底する。フランスとイタリアでは今日でも、医者は患者の家族には癌だと知らせても、当人には伏せておくのを原則としている。例外的にしっかりと知的な患者でなくては、耐えられまいということである。（フランスの代表的な

腫瘍学者から聞いた話では、彼の患者のうち、自分は癌だと知っている者の数は十分の一にも届かないとか。アメリカの場合——医者が治療ミスで訴えられるのを恐れるせいもあるが——患者に対してはもっと正直であるけれども、アメリカ最大の癌病院でさえ、院外患者には通常の連絡書類や診断書を差出人を伏せたまま封書で送るようにしている。その患者が家族の者には病氣のことを内緒にしているかもしれないからである。癌にかかると愛情生活とか、昇進のチャンスとか、仕事とかが駄目になる恐れがあるので、自分の病氣を知っている患者は、それを絶対の秘密にするところまでは行かなくとも、口が極端に重くなるものではある。連邦法のひとつ、一九六六年の情報の自由に関する法令は、「癌の取扱い」に触れ、「正当な理由なく個人のプライバシーを侵害する」恐れがあるとして、それを公開する必要なしとしている。そこに挙げられているのは癌のみである。

癌患者につく嘘と、癌患者がつく嘘のうちに、高度産業社会では死をうけとめるこ

とがいかにも耐えがなくなっているかが反映されている。死はおぞましい無意味な事件とされるようになり、一般に死と同義とされる病氣も隠すべきものとされるに到っている。癌患者に病氣のことを隠したり、ぼかしたりするのは、死の間近い人々にはそのことを知らせないのが一番いい、瞬間的な死、無意識状態での死、睡眠中の死が何よりであるとする固定観念を反映したものである。だが、死の否定を云々してみても、嘘の範囲とか嘘をつかれない気持ちとかの説明はつかないし、奥底にある恐れもそのまま残る。癌患者がほどなく癌の再発で死ぬこともあるというなら、冠狀動脈血栓の患者だって、数年のうちに同じ病氣の再発で死ぬこともある。しかし、心臓病の患者に病氣のことを隠そうと思う者はいない。心臓発作には恥ずべきところなどないのである。癌患者に嘘をつくのは、この病氣が死刑宣告である（あるいは、そうみなされる）からではなく、そこに何かおぞましいものが——不吉なもの、感覚的におぞましく、吐き氣のするようなものが感じられるからだ。心臓病は機械としての身体の弱さ、

故障、挫折を意味するのみで、恥ずべきところはない。昔なら結核、今なら癌にかかっている人々を取巻くようなタブーは存在しない。逆に結核と癌にとりついた隠喩は、それが波及力の特に強い恐るべき生き物であることを暗示している。

2

結核と癌の隠喩的使用の歴史はおおむね重なっている。『オックスフォード英語辞典』によれば、既に一三九八年には *consumption* が肺結核と同義に使われていた。⁽¹⁾ (トレヴィサのジョンからの用例、「血が薄くなると、*consumpeyon* と体の憔悴が起ころ」)。しかし近代以前には、癌もまたこの語に含めて理解されていた。『オックス

フォード英語辞典』は癌の最も古い比喩的な定義として、「ゆっくりひそかに浸蝕し、腐食し、腐敗させ、消耗させるもの」を挙げている。(トマス・ペイネルからの一五二八年の用例、「癌 cancer は胆汁性の膿瘍で、体の各部を蝕む」)。これとは逆に、最も古い字義に忠実な定義によれば、癌とは——語源的には、蟹を意味するギリシャ語の *karkinos*、ラテン語の *cancer* である——生長するもの、塊り、突起物であり、ガレノスによれば、体の外部にできた腫瘍のまわりの血管がふくらむのが蟹の足に似ているところからこの病名がついたもので、多くの人々の臆測とは違って、蟹のごとく這うようにこの病気が転移するからではない。語源的には結核 *tuberculosis* も、かつては異常な突起の一種と考えられていた。この *tuberculosis* という語——この語は瘤とか腫れ物を意味するラテン語 *tuber* の指小辞形 *tuberculum* に由来する——は病的な腫れ物、突起、突出したものを意味するのである。⁽²⁾一八五〇年代に細胞病理学を確立したルドルフ・フィルヒョーまでが、結核結節を腫瘍と